

## 刊 行 の 辞

1200年の歴史を有する四国遍路は、今もなお多くの人々を四国へ誘い、地域の人々もお接待で迎える、生きた四国の文化です。

本センターは、四国遍路の歴史や現代の実態を解明し、世界各地の巡礼との国際比較研究を行うことを目的として、2015年法文学部附属として設立され、2019年には社会連携推進機構のもとで全学センターとなりました。地域との連携をいっそう深めるために、2020年1月には、四国4県を中心とする四国遍路世界遺産登録推進協議会の「普遍的価値の証明」部会と協力協定を結んでいます。同年4月からは、科学研究費基盤研究(B)「霊場資料学の構築と霊場文化の解明による四国遍路の総合的研究」(研究代表者：胡光)を獲得し、学内外の研究者とともに研究を継続しています。

本年度は新型コロナウイルスの5類感染症への移行により、通常の調査やイベントを行えるようになりました。弘法大師生誕1250年の記念すべき年でもあり、地域共創研究センター、俳句・書文化研究センターと共同開催した「弘法大師信仰と地域社会」、協力協定を結ぶ世界遺産登録推進協議会と共同開催した「古代・中世の四国遍路」という二つのシンポジウムを実施しました。

9月24日に開かれた前者のシンポでは、基調講演にお迎えした香川大学の守田逸人教授が「善通寺と善通寺地域一帯をとりまく弘法大師の足跡」と題して、平安時代には弘法大師の聖地として知られた善通寺・曼荼羅寺周辺に、辺地修行者が集まってきていたこと。鎌倉時代の善通寺荘園図を分析すると、境界に弘法大師伝承地があり、信仰が地域社会を統合していく姿を明らかにされました。日本女子大学の福田安典教授は「空海と平賀源内」の関係について、源内の作品構成は、空海が出家宣言をした戯作『三教指帰』に倣っていて、弘法大師や遍路、札所も登場するのは、源内が志度寺の門前で生まれ育ったことによると述べました。胡は、江戸時代に善通寺と海岸寺の間で起きた「弘法大師誕生地をめぐる係争」について、周辺の札所や皇室・九条家を巻き込む大騒動になったことを述べました。愛媛大学の寺谷亮司教授と大学院生・渡邊洋心氏は、「松山市久谷地区におけるお接待を活用した地域コミュニティの活性化」について、ゼミの実践と調査成果を報告しました。歴史学、文学、地理学という多彩な分野から見た弘法大師は、時代を超えて地域に影響を与え続けていることを再認識しました。

四国4県庁を中心に組織された四国遍路世界遺産登録推進協議会では、四国遍路の世界遺産化のために必要な「普遍的価値の証明」の基礎となる『四国遍路史料集 古代・中世編』を編纂しています。四国遍路の原点となる「修行の旅」の史料を一堂に集め、できる限り原本を確認して解説したものです。この最新研究を、鳴門教育大学・大石雅章名誉教授の基調講演をはじめ、愛媛大学・寺内浩名誉教授、同・川岡勉名誉教授、香川大学・守田逸人教授、高知県・岡本佳典文化財保護審議会会長という四国4県の研究者を集めて報告したのが、10月28日に開かれた後者のシンポジウムでした。観音の聖地が大師の聖地へと変化し、中央権力がこれを認めて、信仰が拡大する様子など、聖地や弘法大師信仰の変化について議論を深めました。その成果を本誌の特集として、掲載しています。

当センターが関わった『歴史研究』715号・四国遍路特集、国立歴史民俗博物館「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」、愛媛大学ミュージアム「弘法大師の生涯と信仰のかたち」などのほか、雑誌やテレビの弘法大師特集への協力も多く、記念の年をきっかけに弘法大師信仰への理解が深まり、四国の文化に親しんでいただければ幸いです。

末筆ながら、今後とも本センターへの御支援・御協力をお願いいたします。

愛媛大学 四国遍路・世界の巡礼研究センター長

胡 光